

ユメコネクト④

とどけ! ホントの^{きもち}気持ち!

^{なるい つゆまる}
成井露丸・作

くずもち・絵



アルファポリスきずな文庫

もくじ

プロローグ 6

① ドキドキ！

球技大会シーズン 8

② 魔物つてなんだろう？ 21

③ 幼馴染？それとも……？ 28

④ また来た、魔物!? 36

インターロード②

ぶつかった体とすれ違う心 110

⑨ 救出作戦会議 127

⑩ 仮面の騎士 138

⑪ 南の魔女 154

⑫ 大決戦！ 167

⑤ 「巨大な穴」作戦 52

⑥ なんだからギクシヤク!? 64

⑦ 練習試合 75

⑧ 広がる異変 87

インターロード①

今も昔も、大切な人 100

⑬ コメンね、そして、ありがとう 185

⑭ 球技大会 194

エピローグ 202



エレナのパートナー
にしてクールな「黒
の騎士」。

はるか ぜん せ すかた
遙香の前世の姿!
まもの たいじ
魔物を退治して
る「白の騎士」。

ぜん せ
エレナの前世の
こんやくしゃ 氷の
婚約者。魔術を使う。

はるか おさななじみ じつ
遙香のイケメンな幼馴染。実は
ぜん せ はるか
前世から遙香のパートナー!
りひと
理人をライバル視している。

ぜん せ はるか こんやくしゃ じつ
前世は遙香の婚約者。実は
うんどう とくい
運動も得意みたいで……!?

リリアンヌ・
フェルシュタット

ローゼンマイヤー

エレナ・

シャリフ・
アイスウィンド

なぞ 謎の騎士

みんなの夢に現れる不
思議な姿。正体は――

火野
真姫那

ぶんげい ぶ こうはい たの
文芸部の後輩。頼もしい
はず、だったけど……?

木辻
唯

ぶんげい ぶ こうはい
文芸部の後輩。
うんどう たい
運動は大の苦手……!

桐島
海斗

氷河
理人

結女
遙香

うんどう とくい
運動が得意! だけどひと
りでまったり本を読むのが
好きな中学二年生。

登場人物

西野
京子

はるか しんゆう かいと はるか
遙香の親友。海斗と遙
香を見守っている。

「どうして、魔物と人間と一緒に仲良く暮らせないのかしら？」

魔法大学の塔の上を、初夏の風が吹き抜ける。

揺れる赤い髪を、少女はそつと右手で押さえた。遠くを見るようにその目は細められている。そんな彼女に、私は苦笑いを浮かべて、返す。

「それはお互いに傷つけあつてしまふからじゃない？」

「でもそれって、人間が勝手に魔物たちのことを決めつけているからよ。——きつといい方法がある。魔物と人間が、共に生きることができする方法が。……私はそう思うの」

大学の同級生である彼女は遠くを見つめたまま口をへの字に曲げていた。

塔のへりに頬杖を突いて、彼女は頬をふくらませている。

そんな意固地な彼女のことを、私は嫌いじゃなかった。

「みんな魔物っていうとすぐに悪者扱い。見つけるとすぐに追い払おうとする。彼らの住む場所を奪つて、森を焼いて、田畑にする。魔物たちだって、生きている。彼らには彼らの生活があるし、彼らなりの生き方があるのよ」

そう言つて彼女はこちらを振り向いた。赤い瞳が私をじつと見つめている。

「それを悪だと決めつけて、人間は自分たちの生きる場所ばかり広げようとする。勝手に立って、自分たちが魔物を倒すのは正しいことだと、魔物は悪者だと子供たちにも教え込む。私はそれが『正しい』ことだと思えないの。……ううん、『正しい』と、思えなくなつちやつたの」

たの

彼女はもうすぐ魔法大学を卒業する。同じ学年の中でも、飛び抜けて優秀な彼女は、きつと近いうちに四大魔法の称号「南の魔女」を継承することになるだろう。

彼女の想いは、純粹だ。でも同時に、この王国、この人間社会にとって、その考え方はとても危険なものだと思わずにはいられなかった。

王都から離れて建つ、魔法大学。森に囲まれたこの場所で、私たちは共に学び言葉を交わし、青春を過ごすしてきた。いつか自分たちが魔法使いになって、真理を追求し、この世界のみんなの役に立つために。

「だからこの大学を卒業したら、私はそんな世の中を作ってみせる。人間が、人間だけじゃなく、もっといろんな存在と、共に暮らせる世界を」

彼女の名前はミカエラ・ローエ。

後に「南の魔女」として王国を危機に陥れることになる少女。

①ドキドキ！ 球技大会シーズン

舞い散る桜の花びらから始まった春の季節も、やがて緑の若葉に装いを換え、過ぎ去っていく。

浮かれた気分は連れさられて、ちよっぴり疲れた気だるさと一緒に学校が始まった。

そして体育館の全校集会では、ゴールデンウィーク明けの気だるさの象徴みたいな、校長先生の長いお話。

だけど、そんな気だるさは、その後に見られた生徒会長の一言で、吹き飛ばされた。

「みなさん、今年の球技大会の種目はバスケットボールです！」

体育館のステージ壇上、凛とした立ち姿で神沢香久夜先輩が宣言する。

「「うおおお〜！」」

その瞬間、体育館は色とりどりの声で満たされた。喜びと、興奮と、困惑と、悲鳴がごちゃ混ぜの喧騒。一年生から三年生まで全員がさげんでいる。神沢先輩はそんな全校生徒の様子に目を細めながら、悠然と立っていた。

「はるかちゃん、バスケットボールだつて！」

クラスで二列になつて座つていた前から、京子ちゃんが振り返つて語りかけてくる。



三角座りの膝の上で頬杖を突きながら、返事をする。

「うーん、私、最近全然やっつけないから、練習しない」と

「でも、できちゃうでしょ？ はるかちゃんは運動神経いいもんね」

「それほどでもないよ。スポーツは好きだし、バスケットも好きだけどね」

「うちは運動全般苦手だからなー。体育の時間とか放課後とかで練習始まるんだよね？」

鬱だなあ。抜け出したいよ〜」

本当に憂鬱そうに唇を尖らせる京子ちゃん。

なんとなく気持ちわかる。京子ちゃん、外で運動するタイプじゃないしね。まさに文芸部。

「無理は禁物だけど、楽しめる範囲で楽しもうよ。大丈夫、みやこちゃんの分は私がしっかり働くから」

そう言っつて私が腕を曲げて力こぶを作ると、京子ちゃんは「お願いしますっ！」と両手を合わせた。

ちらりと壇上を見上げる。ちょうどぎわめきが静まって、神沢先輩と目が合った気がした。

「生徒会からの報告は以上ですが、なにか質問はありますか？」

ブレザーの内ポケットから取り出した紙を右手に、神沢先輩は穏やかに微笑んでいる。

神沢先輩は四月にあったイフリート事件で、魔物に取り憑かれて、高熱を出した。

南の魔女の被害者だったのだ。そういえばあの時ステージ上で倒れるなんていう事件もあったなあ、とちよつと懐かしく思い出す。まだ一ヶ月も経っていないのだけれど。

イフリートは、初めて私が倒した強敵の魔物だ。本当の初めでは京子ちゃんに巢食った、ウイル・オー・ウイスブだったんだけど。あれはそんなに強くなかったし。

「……どうしたの？ はるかちゃん？」

「あ、なんでもない」

知らない間に京子ちゃんのことを見てしまつてみたい。私は首を横に振った。すると京子ちゃんがふと視線を斜め後ろに向ける。

「でも、バスケットボールなら、海斗くんだよー。大活躍するんじゃない？」

「それはそう」

視線を男子の列へと動かす。ちよつと海斗もこつちを見ていて、目があった。バスケットボールで嬉しいだろうなー、と思つて小さく手を振る。

海斗もなんだか嬉しそうに手を振り返してきた。

意外に素直なリアクション。

「ただどその後、ハッとしたような表情を浮かべると、海斗は急に視線を泳がせてそっぽを向いた。」

「——ん？ なんだそのリアクションは？」

「どうしたの？」

「ううん。海斗が手を振り返してきたのに、急に目をそらしたから。……なんだか無視された——みたいな？ いつものことだけど。……ん、どうしたの？」

「京子ちゃんがなんだか、ニンマリと微笑みながら見上げてくる。」

「ぎつと照れてるんだよ。海斗くん」

「照れてるって、なんで？」

「それは、うちからは言えませぬ」

「京子ちゃんはその言うのと、きしししと笑いながら壇上に視線を戻した。」

「壇上では生徒会長が説明をまとめに入っていた。」

「——というわけで、本日から、さつそくクラス対抗球技大会の練習期間に入ります。大会は五月末。優勝クラスには豪華賞品も出ますので、各クラス、気合を入れて頑張ってくださいね。あと怪我には絶対に気をつけてください！」

「そう言って神沢先輩は生徒会からの説明を終えた。」

「先輩の左隣に立っていた副会長はメガネをクイと動かす。神沢先輩がステージから降りる階段に向かうと、右側に立っていた書記の先輩と副会長の先輩も生徒会長に従ってステージを後にした。」

「今日の全校朝礼は特にそれ以上のアナウンスなく終了。本日のコンテンツは校長先生からの「ゴールデンウィークは終わったけれど、休日気分から抜け出して、気を引き締めていきましょう」というありがたいお言葉（そんなに長い話じゃなくて良かった！）と、生徒会長からの球技大会のアナウンスだけだった。全校集会は短いに越したことはない。よし。体育館から教室へ向かう道すがら、海斗の背中を見つけた。」

「あ、海斗——」

「ねえねえ。結女さん、バスケ得意だよね？」

「その背中（せなか）に声をかけようとしたところで、クラスメイトたちに取り囲まれてしまった。中途半端な呼びかけは届かなかったみたいで、海斗は男子の友人たちと喋っている。」

「ま、いつか。」

「え……、あ、うん。嫌いじゃないけど、うーん、そんなに上手くはないかも？」

「でも、去年の体育で、活躍してたじゃん？」

あー、そういえば去年の体育はバスケットがあったんだ。私、活躍してたっけ？ してた気もする。

クラスの子は私の都合など知らないように話し続ける。

「私たちのクラス、女子バスケットの子いないじゃん？ 結女さんが引つ張ってくれたらうれしいかなって！」

彼女はそう言うと、周りの女子も「うんうん。まじ助かる」と同調した。

私はどう答えようかと考えていると、クラスメイトたちは「よろしくー！」と言って廊下へと先に去っていった。

「大変だねー。でも、うちのクラスの女子に、バスケット部の一人もいないから、本当に遙香ちゃんに期待がかかっちゃうかも？」

後ろに立っていた京子ちゃんがにこにここと微笑む。

「部員レベルの期待をされても困っちゃうんだけどなあ……」

そう言いながら、男子バスケット部員の海斗の姿を目で探す。

海斗は向こう側で男子数人に囲まれて、顔をくしやりとさせながら笑って応じていた。

あいつは本物の男子バスケット部員。しかもレギュラー。

うちのクラスの男子バスケットは、今月、海斗中心に回っていくんだろ？ となんとなく思う。

京子ちゃんも同じ方向を見ていた。

「桐島海斗選手のターン、って感じですかね？ はるかちゃん」

「そうだね。海斗、がんばれ〜」

「……はるかちゃんもね〜」

「は〜い」

そんなことを口にしなから、私たちは教室へと向かった。

渡り廊下から校門の方を見ると、すっかり桃色の花を散らして、新緑を抱えた桜の木が風に揺れていた。

ゴールデンウィークで春の季節に一区切りがついて、新しい日常が始まっている。そんな気がした。

「せんぱーい。うちのクラス、男子がすごい張り切っちゃって、男女一緒に優勝する気満々なんですよ」

「……つらいです」

困っているような声をあげながらも活き活きとした声の眞姫那ちゃんとは対照的に、唯ちゃんは壁に身体をあずけて放心した表情を浮かべていた。

球技大会は全学年全クラス対抗の大会だ。一年生から三年生まで、学年を超えて予選リーグと決勝トーナメントを戦う。

普通に考えたら三年生が有利なんだけど、一年生や二年生が勝つこともある。弱そうに見える側が強そうに見える側を倒す——いわゆるジャイアントキリングを起こすことをめざす一年生クラスも多いのだ。

まあ、とはいえ、「そんなノリについていくのがしんどい勢」も存在するのである。

「つらいよね」

魂を失っている唯ちゃんに、京子ちゃんが寄り添う。見ると、両手の指を絡めあつて完全に共感モードだ。京子ちゃんも根っから文化系で、スポーツは出来るだけ回避するタイプだもんね。応援は大好きみたいだけだ。

唯ちゃんと京子ちゃんがささやき合う。

「練習さぼっちゃおう？」

「——本番もさぼっちゃおうか？」

「——こらこら、お〜い！」

私がツツコむと、唯ちゃんと京子ちゃんは両手の指を絡めて、目をうるうるさせたままこつちを振り返った。

文芸部だといつも率先して活動する真面目な二人が、運動の話になると不真面目グループに変わるのなんだから面白い。



眞姫那ちゃんは、そんな二人を見て勝手に笑ってから、私へと振り向いた。

「でも、逆に、文芸部の活動も難しくなっちゃうかもですね。結構、放課後に練習とかあると思えますし。部長！」

「うーん、確かにそうだなあ。あ。理人くんはクラスの球技大会の練習とかちゃんと参加するの？」

私はソファで気配を消すように文庫本を開いていた理人くんを声を掛ける。
眞姫那ちゃんと唯ちゃんは理人くんの存在に気づいていなかったみたいで「あ、先輩いたんですか!？」と驚いている。

理人くんは本を閉じると、微笑んだ。
「もちろん参加するよ。バスケットボールはいい運動になるからね」

「そうなんだ。なんとなく理人くんって、そういうの参加しないタイプかなー、とか思ってた」

「——まあ、興味がなければ参加しないけどね。バスケットボールには興味があるし」
「そうなんだ？ 理人くんがバスケットボールが好きって意外かも」

人差し指を口元につけて考える。

あんまりイメージがないかな。まあ、なんでもそつなくやりそうだけだ。

「バスケットボール自体はどちらでもいいんだけどね。——バスケットボールは桐島が得意な競技なんだろう？ それは面白いと思ってるね」

そう言うとなら、理人くんは不敵に笑った。海斗を意識するみたいなのセリフにちよつとびっくり。理人くんってバスケットボールで海斗にライバル心とか持っているのかな？

私が首をかしげていると、隣で京子ちゃんが口元に手を当てて、ニヤニヤしていた。
なんなんだろう？

私は椅子に座ってカバンの中から紙の束を取り出す。それは私たちが、ゴールデンウィークの合宿で書いた小説だった。海辺の街にみんなで行った、初めての文芸部合宿。いろんなことがあった。

よく考えたら、私たちイフリート事件からサラマンドー事件、海辺の街でのアモン事件って、この二、三週間休みなし。

文芸部の活動の意味でも、京子ちゃんのコンテストの締め切りに、クラブ紹介イベント、そして文芸部合宿での初執筆。

これつてめちやめちや充実してない？ つていうか、すつごく忙しかったよね？

「……このあたりで、一度、休みをとつてもいいのかも？」

私が咳くと京子ちゃんが、私の顔をのぞき込んできた。

「それつて文芸部のこと？」

「そう。四月からずつとイベント続きだったじゃん。みんな疲れているだろうし、今日から球技大会の練習期間に入るし、明日から文芸部は、大会が終わるまで一旦お休みつてことではないかなつて」

私がそう部長つぼく提案すると、特に反対もないよううで、みんなから「わかりましたー」

「了解でーす」と返事がある。

一旦、部活を休みにするということで、みんなに了承された。

そもそも文芸部つて運動部と違つて、定期的な練習とかがあるわけでもないしね。休みにするといつてもほとんど気持ちの問題だ。

唯ちゃんなんかはキラキラした目で京子ちゃんを見つめている。

「先輩！ 私、休みの間に、個人的に小説、書き進めます！ また読んでください！」

……本末転倒じゃない？

まあいいんだけどね。京子ちゃんも「わかつたー。じゃあ、うちも書こうかな」なんて言つている。やつぱり、二人とも球技大会は眼中にない感じですね。はい。

私は机に広げた原稿をめくつた。

合宿で書いたみんなの小説をまた読み返そうかなつて。

② 魔物つてなんだろう？

昼下がりの太陽の光が窓から差し込む、放課後の文芸部室。

部屋の蛍光灯の明かりよりもキラキラとした外の陽光が部屋の中にふんわりと広がつている。

一人つきりになった部室で、私は原稿を膝の上に広げながら、ソファに沈み込んでいた。原稿から顔を上げて、一人物思いにふける。

一時間ほど前に、文芸部のおやすみを宣言したあと、みんなはそれぞれに用事があるみたい

で、部室を出て行つた。

真姫那ちゃんと唯ちゃんは早速クラスの練習打ち合わせで、京子ちゃんもちよつと先生に

用事があるとかで部屋を去っていたのだ。なお、理人くんは普通に帰った模様。

ゴールデンウィークの間、私たち文芸部は初めて合宿を開催した。

真姫那ちゃんのおじいさんの別荘がある、海辺の街への三泊四日の旅だった。

そこで私たちは真姫那ちゃんのことこの怜央くんに出会った。

真姫那ちゃんの話だと、重い病気にかかっていたはずだった怜央くんは、すごく元気だった。でも、その元気は、本当の元気じゃなかった。彼に取り憑いた大魔人アモンが街のみんなから少しずつエネルギーを奪って生み出していた偽りの元気だったんだ。

怜央くんと一緒にいた真姫那ちゃんが洞窟で倒れて、病院に運ばれた。後から、真姫那ちゃんが倒れたのもアモンにエネルギーを吸い取られちゃったからだってわかった。

あの花火大会の夜、たくさんの人がアモンのせいで苦しんでいるのを見て、私たちは大魔人アモンを倒す決心をした。

すごく強くて、一人じゃ絶対に無理だったけど、海斗と理人くんが駆けつけてくれて、シャリフとリリアンヌ、そして私——エレナの三人の力を合わせて、なんとか勝つことができた。

それでも、全部が解決したわけじゃなかった。

一番の問題は怜央くんの病気のこと。

アモンは怜央くんにエネルギーを与えて生かし続けてくれたいたので。

アモンがいなくなつて、怜央くんはまた元の病気と向き合わなきゃいけなくなつた。

海外での難しい手術に挑戦すれば回復するチャンスはあるんだって、怜央くんのおじさんが言っていた。だから、私たちは怜央くんを「応援する」ことにした。

唯ちゃんの発案で、私たちみんなが書いた物語を怜央くんに届けることにしたんだ。

海外での難しい手術に挑戦するか迷っている怜央くんが、一步を踏み出す応援になればなつて。

真姫那ちゃんと私にとって、それは初めて書き切った小説だった。

その小説の原稿が、今、私の両手にある。

紙をぺらりとめくると、真姫那ちゃんの書いたセリフが目飛び込んでくる。

『あなたに私が持っている魔法の力を貸してあげる。だから海の向こうでも素敵に頑張つてね』

真姫那ちゃんの物語の主人公は魔法使いの少女。魔法使いの少女は少年の首筋にそっと手を当てて、少年に力を与える。そのシーンが妙に印象的だった。

「——あ、はるかちゃんまだいたんだ」

コピー用紙の原稿から顔をあげて振り返ると、開いたドアから京子ちゃんが入ってきていた。右肩から学校のカバンを掛けている。

「うん、ちよつとね。なんとなく居残り活動？ みたいな？」

「えらい。さすが部長！」

私は太ももの上の原稿の世界から離れて、座ったまま「うーん」と伸びをする。

京子ちゃんは机の上にカバンを置くと、隣までやってきて私の手元を覗き込んだ。

「眞姫那ちゃんの小説？ これ、とても良かったよね。うちも面白いと思ったよ」

「うん、すごく。初めて書いたなんて思えないくらい。なんだか、読んでるとどこかの海の街の景色が目に浮かぶみたいでさ。眞姫那ちゃんの気持ち、ぎゅって詰まってる感じがして」

「うん。唯ちゃんがしつかりサポートしてくれたことを考えても、初めてでここまでちゃんと書けるのってすごいと思う。ファンタジーの世界なのに情景描写もしつかりしているし」

「そうだよ。しつかりしている。本当にこの世界を見てきたみたい」

京子ちゃんに言われて、私はもう一度原稿に目を落とす。

眞姫那ちゃんが紡いだ勇氣と挑戦の物語。怜央くんへの、たった一つの応援歌。

だけどそこに私は微かな違和感を覚えるのだ。描かれたその世界が私——エレナが住んでい

たあの世界ととてもよく似ている気がしたから。もちろん、ただの偶然なのだと思うけれど。

「怜央くん、海外に手術を受けにいけるのかな？ 届くといいね、眞姫那ちゃんの想い」

京子ちゃんはそう言って、自分のことみたいに優しく微笑んだ。

京子ちゃんはいつもそうだ。人の気持ちに寄り添ってくれる。とても優しく賢い私の自慢の友達。

「そうだね。アモンは倒せたけど、それで全ての解決じゃなかった。……これからだもね、怜央くんの戦いは」

私たちは、怜央くんを助けたくてアモンと戦った。でも、アモンを倒したことで、怜央くんはまた病氣と一人で向き合わなきゃいけなくなったんだ。

アモンは怜央くんの元氣を奪っていたわけじゃない。むしろその逆。他の人から奪った元氣で、怜央くんを生かしてくれていたんだ。

もちろん、それは間違ったことだったんだけど……。だけどアモンが怜央くんを生かしていることも事実。そう考えるとあの海辺の街の戦い以来、ずっと引つかかっている「魔物」ってなんなんだろう？」という疑問がまた頭に浮かんでくる。

私はその疑問をぼろりと口にした。

「みやこちゃん、——魔物ってなんなんだろうね？」

「ん？ どういうこと？」

首を傾げられて、私は首を横に振る。

「うーん。……ごめん。私も、まだ上手く言葉にできないや」

これまでのことを、改めて思い返してみる。

最初にジャック・オー・ランタンに取り憑かれた京子ちゃんは、「もつと面白い物語を書きたい」って必死だった。あの魔物は、その情熱の炎に薪をくべるみたいに、京子ちゃんの集中力を高めて応援してたんじゃないかな。

神沢先輩の時もそうだ。イフリートは、先生への秘めた恋心を、勇気に変えようとしてくれたのかもしれない。「好き」って気持ちを伝えるための、最後のひと押しみたい。

唯ちゃんだって、「大切な文芸部を守りたい」っていう純粋な気持ちがあったから、サラマंडーはそれに力を貸した。やり方は間違ってたけど、彼女の理想の居場所を守るための、不器用な支援者だったのかも。

そして、怜央くんとアモン。「生きたい」「真姫那ちゃんと一緒にいたい」っていう、彼の切実な願いを、アモンは命を繋ぐことで叶えようとしてくれた。

みんな、心の中に強い「願い」を持っていた。

魔物たちは、ただその気持ちをも、それぞれのやり方で一生懸命に応援してくれていただけなのかもしれない。

だとしたら、私たちがやってきたことって、本当に正しかったのかな？

私たちは、他の願いを斬り捨ててきただけなんじゃないだろうか。

——魔物を倒すだけじゃ、本当の解決にはならないのかもしれない。

あの一件から、なんだかずっとそんなことばかり考えてしまう。

「本当に、運動部は元気だよね。……あくあ、球技大会、憂鬱だなあ」

京子ちゃんの声に顔を上げると、京子ちゃんは明るい窓の外を眺めていた。

窓の外ではサッカー部が、練習試合をやっているみたいだ。大きな掛け声が聞こえてくる。

京子ちゃんの「球技大会」という言葉で、私の意識は一気に現実へと引き戻された。

スポーツは別に嫌いじゃない。むしろ好きな方だから、いつもなら球技大会とかは大歓迎。

でも、ゴールデンウィークの合宿も、魔物との戦いも、なんだか色々ありすぎたので、ちよつとはゆつくりしたいっていうのが正直なところだ。

エレナの意味でも、魔物さんがしばらく現れないことを祈るのみ。

でも、魔物たちがしばらく来ないってことを期待できる状況なのだろうか？
海辺の街での戦いで、アモンが言っていた意味深な言葉を思い出す。

『来るべき南の魔女ミカエラ・ローエ様の復活に向けて』

あの時、アモンは確かにそう言っていた。先生の話の中でも、そして夢の中でも登場する名前——「南の魔女」。彼女は、この世界のどこかで、本当に、復活の時を待っているのかもしれない。

③ 幼馴染？ それとも……？

球技大会の練習初日。ゴールデンウィーク明けの全校集会の次の日から球技大会の練習が本格的に始まった。なんと体育の授業は今日から全部バスケットボール！

湿った熱気と何人ものシューズが木の床を激しく擦るキュツキュツという独特の音がする。体育館は、クラスメイトたちの楽しそうな掛け声で満ちていた。

「遙香、ナイスカット！」

相手チームのパスをキャッチして止めると、味方からの声があがる。いくよつ！

そのままコートを駆け上がり、低いドリブルで相手ディフェンスを一人、二人とかわしている。ゴール下にディフェンスが二人集まってくるのを見て、一度右サイドにいた味方にパスを出した。

「お願い！」

相手の意識がパスに集まった瞬間、私はゴール下に切り込む。

味方から、ふわりとしたパスがナイスなタイミングで返ってきた。それを空中でキャッチすると、ステップを踏み、レイアップシュートを放った。

ゴールの輪にボールをちよんつてのせる感覚。ボールはバックボードに軽く触れてから、リングの中を通り、軽やかな音を立てながらネットを揺らした。

「ナイス、遙香！」

チームメイトと心地よい音を立ててハイタツ



チを交わす。

やったね!

エレナとしてユメコネクトで戦う日々。飛んで、跳ねて、駆けて、魔物と戦うのは、私は私でも、エレナ・ローゼンマイヤーとしての私だ。だけど今は結女遙香としての私が、コートを手を抜ける。

汗で湿った体操着が肌に張り付くことさえも、なんだか心地よかった。

魔物を倒すんじゃないやなくて、みんなで一つのボールを追いかけるのが、楽しい!

甲高い笛の音がなつて、ゲームは休憩時間に突入した。

「ぶはあ〜」

「遙香、おつかれ〜。やつぱ運動神経いいよね〜」

「ありがと〜。そう言ってもらえると嬉しいけど、やつぱりバスケットの子には敵わないよね〜」

「まー、それはしやーなしじやん?」

いつもはあまり話さないクラスメイトとも、スポーツをしている時は不思議と会話もはずむ。こういうところもスポーツの面白いところだよな。

給水のために、ペットボトルのふたを開けて口に運ぶ。

そこで、チームメイトの女子数人が、私の後ろの方向を見ているのに気づいた。

ペットボトルをくわえたまま、つられて私も振り返る。

そこではいつもと全然違う表情の海斗が走っていた。

腰までの高さの仕切りの向こう側は、男子たちが練習しているコートだ。

コートの上で、海斗は、圧倒的な存在感を放っていた。二年生になつてバスケット部のレギュラーとしてますます活躍している幼馴染。バスケット部員ではないクラスメイト達に囲まれながら、海斗がなにか指示を出している。バスケットボールに慣れない他のチームメイトに声をかけているみたい。

額に汗を光らせ、鋭い視線でコート全体を見渡し、通る声で指示を飛ばす。

そんな海斗がボールを持つと、周りの空気がフツと変わるのがわかった。リズムカルなドリブルで相手を翻弄し、ふわりと跳び上がって放たれるシュートは、魔法みたいにゴールネットに吸い込まれていく。

——すごい!

視線が引き寄せられて、なんだか胸の奥まで引っぱられるみたいになる。

「……遙香? どうしたの?」



チームメイトの声に、はつと我に返る。

その時、ちょうど、試合再開の笛の音が鳴った。

「う、ううん、なんでもない！ いこつか！」

慌てて首を振ってごまかすと、私はみんなと一緒にコートへと戻った。

コートに戻ってプレイ再開。

それから後半戦を戦って、結局練習試合は十点差で私たちのチームの敗北だった。むむむむ、無念！ やっぱり、バスケット員がない中で、クラス対抗の球技大会はなかなか厳しそうだ。

練習しなくっちゃ！

「お疲れ様ー！」

「疲れたー！」

練習が終わわり、私たちは体育館の隅に集まった。汗を拭いたり、ドリンクを飲んだり。心地よい疲労感だ。クラスの女子たちとの一体感が、なんだかくすぐつたい。

「今日の遙香、キレッキレだったね！ すごかったよ！」

同じチームのクラスメイトが、興奮気味に私の肩を叩く。

近くにいた京子ちゃんも「うんうん」と嬉しそうに頷いている。体育の授業だから、京子ちゃんもちゃんと参加している。さつきと交代してコートから出て行ったから、実際にプレイしていたのは五分くらいだったけど。

「え、ありがとう！ 運動系の部活やってないし、できるかなって不安だったけど、なんとかなってるよかった！」

照れながら答えていると、体育館の出口に向かっていた男子チームが目に入った。その集団の中から、海斗がこちらを見ているのに気がつく。

私が「おつかれ」と手を振ると、一瞬間の間があった後に、海斗も手を振り返してきた。「おつかれ」って感じでその口を動かしながら。その瞬間、周りにいた女子たちが、待つてましたばかりに私を囲んだ。

「ちよっ！ 今の見た!? やっぱり二人、怪しくない？」

「そうだよー！ ていうかさ、もうぶつちやけ聞いちゃうけど、遙香と桐島くんって、もしかして……っていうか、絶対付き合ってるでしょ？」

「ぶっ!？」

飲んでいたスポーツドリンクを、思わず噴き出してしまった。

ゲホゲホゲホ。——むせた。

「わー、遙香ちゃん！ 大丈夫？」

「……だ、大丈夫」

「あー、凶星？」

凶星じゃないって！ 付き合ってるんかないから！

その時、さつきまでコートで見た、海斗の姿が脳裏に浮かんだ。

バスケットボールを持って、コートを駆け抜ける海斗。

その姿に黒い剣を持って草原を駆ける黒の騎士リリアンの姿が重なる。

だけど、それはやっぱり海斗で——

急に頭が真っ白になった。固まった私に、またきらきらした声がかかる。

「やっぱり、付き合っているでしょ？ 桐島くと遙香」

「はあ!? 何言ってるの！ ないない、ありえないから！ 海斗とはただの幼馴染で、腐れ縁

なだけだっばー!

自分でも驚くくらい大きな声が出てしまった。

周りにいた他のクラスの子たちも、びつくりしてこちらを見ている。

なんだかめちやくちや恥ずかしくなつて、気づけば私は必死で否定の言葉を並べていた。まるで自分自身に言い聞かせるみたいに。

「えー、そんなに怒らなくてもいいじゃん」

「そうだよー、怪しいー」

チームメイトの女子たちが冗談交じりに笑いながらはやし立てる。

私は「もう！」と熱い顔を隠すように、タオルで顔を覆った。

隣で京子ちゃんが「あちゃー」と言うのが聞こえる。

この時の私は、そんな私の否定の言葉が、海斗本人に聞こえていたことに気づいていなかったし、それを聞いて、海斗がどんな風に感じていたかなんて、知る由もなかった。

④ また来た、魔物!?

「失礼します」

放課後、私は一人で保健室の扉を開けた。京子ちゃんに「御堂先生が、急ぎで遙香ちゃんの

こと呼んでるよー！」って伝えられたからだ。嫌な予感がすつごくする。

中に足を踏み入れると、ひんやりとした消毒液の匂いが鼻をついた。

カーテンで仕切られたベッドの一つからは、苦しそうな寝息が聞こえてくる。その枕元に見つけた顔が二つあった。海斗と理人くん。海斗はベッドの枕元に立っていて、理人くんはベッドの横に置かれた椅子に腰かけながら本を読んでいる。

「わ、いつもの三人組が揃ったね！」

私が明るく声をかけると、理人くんは読んでいた本から顔を上げて、いつも通りに涼しげな表情で返してくれた。

「やあ、結女さん。待っていたよ」

でも、この三人が呼び出されていることは、魔物退治の件だね。やつぱり。ぎやぼん。女子生徒が横になるベッドに近づくと、海斗の隣に立った。

「海斗もおつかれ。部活も球技大会もあってバスケ漬けなのね」

そう言っただけで海斗を見ると、海斗も同時にこちらを見たみたいで、目があった。

海斗が私のことをじつと見つめる。「なんだろ？」と思いつつ、その視線を受け止める。だけど、数秒たって、ハツとしてから海斗は視線をそらした。それから「あ、……ああ、そう

だな」とその横顔に、ちよつとぼつが悪そうな表情を浮かべている。

——ん？ なにかあったのかな？

そういえば、練習中も……と思った時だ。

「みんな、揃ったわね」

ちよつと気まずい空気を破るみたいに、御堂先生が部屋奥から白衣を翻して現れた。その右手でカルテを広げている。

「ごめんなさいね、合宿から帰ってきたばかりで、しばらくはユメコネクトもお休みできれば良かったんだけど。……さつそく状況が動き出したみたいなの」

先生はベッドで横になつてしている先輩の首筋にそつと手を添えた。長い髪がよけられたうなじには、黒い薔薇の紋章が浮かんでいた。

これは南の魔女に使役された魔物が取り憑いている証拠。

「わかるわね、結女さん？ この子に取り憑いた魔物を退治してほしいの」

やつぱり、嫌な予感は当たつたみたい。

ゴールデンウィーク明けで、早速、魔物のご登場だ。まじかー。

「なんだか、休みなしで働いていませんか？ 私たち？」

「正義の味方の組織はいつも人手不足なのよ。だつて、困っている人を『お休みだから』って放っておけないじゃない？」

先生にウィンクされて、私は「うつ」と口をつぐむ。うん、それはそうだ。

「単刀直入に言うわ。この子に取り憑いている魔物はきつと『フレア・エレメンタル』。純粹な炎の魔力でできた、いわば炎の精霊そのもの」

「フレア・エレメンタル……」

海斗が、その名前を呟いて繰り返した。見ると、理人くんも心当たりがあるっぽい。

そして、私は、——いつも通り、全然覚えていません。うぐう。

「強いですか？」

「うーん、どうかしら。イフリートやアモンなんかと比べるとずっとレベルは低いわ。でも、ウィル・オー・ウイスプやレッサーサラマンダーよりは上、つてところかしら」

「でもまあ、少し厄介な相手ではありますね」

理人くんがそう言うのと、御堂先生はうんうんと頷いた。

「ええ。氷河くんの言う通り、フレア・エレメンタルは少し厄介よ。実体がないから、物理的な攻撃はほとんど効かない。必勝法は……覚えてる？」

先生はそう言いながら、私たちの表情を順番に確かめるように視線を巡らせた。そう言われても、エレナとしての記憶をまだ断片的にしか思い出していないからなあ。

でも理人くんは知っているみたいで、自信ありげにこくりと頷いた。

「戦い方はユメコネクトした後、教えるよ。エレナにもリリアンヌにも。もつとも桐島は、覚えていそうだけどね」

「あ……ああ、もちろん。フレア・エレメンタルだろ？ 負けはしないさ」

「じゃあ、お願いできるかしら？ 三人とも」

「……はい！」

必勝法とかよくわからないけれど、わからなくても突入するのはいつものことだ！

苦しうにしている人が目の前にいる。それなら私たちにできることは一つなんだ。

最近ずっと考えていた「魔物ってなんだろう？」って疑問には一旦ふたをする。

私はポケットからクリスタルのチャームを取り出した。

海斗と理人くんもそれぞれ同じものを取り出す。

ベッドで苦しうに眠る先輩を囲むように、私たちは立つ。

「行くね。二人とも！」

「ああ」

「いつでも」

声を出して心を奮立たせる。

海斗の短い返事と、理人くんの静かな声が重なる。

私たちはそれぞれのチャームを握りしめ、声を一つにした。

「ユメコネクトッ！」

*

唱えた瞬間、三つのクリスタルから放たれた七色の光が、保健室の空間を満たしていく。

めくるめく光の渦。身体がふわりと宙に浮かび、地球の重力が消えていく感覚。

見えない力に導かれるように、私の身体は光の中へと吸い込まれていく。

世界が回転して、身体が七色の光に包まれていく。

制服は光にかき消され、肩当て。胸当て。腰当て。

私の防具が、まるで意志を持つているかのように装着されていく。

そして左の腰には、私の白い剣《ヴァイス・シュフィアート》。

私は——白の騎士エレナ・ローゼンマイヤー!

やがて、激しい光の渦は収束し、私の身体はゆっくりと地面へと降ろされた。白いブーツが床を踏みしめる。そこは、さつきまでいた保健室ではなかった。

隣では、海斗と理人くんから姿を変えた黒の騎士リリアンヌ、そして氷結の魔術師シャリフ。それぞれの身体を包んでいた光の渦が晴れ、その二人が姿を現した。

シャリフが周囲を見回して呟く。

「ここは……体育館?」

彼の言う通り、ここは学校の体育館によく似ていた。

先輩が倒れた場所の記憶だろうか。

見慣れた体育館のはずなのに、空気が陽炎のようにゆらゆらと歪んでいる。

床も、壁も、バスケットゴールさえも、まるで燃え盛る炎の中から見ているみたいに、その

輪郭がぼやけていた。

天井を見上げると、黒い渦がゆらゆらとぐるぐるを巻いている。

そして、肌を刺すような、圧倒的な熱気。

その熱気の中心で、そいつは揺らめいていた。

人の形をしているようで、していない。ただ、燃え盛る巨大な炎の塊。それが、私たちを認識し、意思を持っているみたいに揺らぐ。

あれが、フレア・エレメンタル!?

「行くわよ、リリアンヌ!」

私は隣に立つ黒の騎士に声をかけ、誰よりも先に地面を蹴った。白い剣《ヴァイス・シュフィアート》を振り抜く。でも、その刃は確かな手応えもなく、揺らめく炎を虚しく通り抜けた。

「——あれ!」

「エレナ! 通常状態だと、当たらない! フレア・エレメンタルに実体はないんだ!」

リリアンヌが舌打ちしながら振った黒い剣も、同じように空を切る。ほんとだ。

「その通り。そのままでは物理攻撃は効かない。だから僕達の連携攻撃が必要なんだ」

シャリフが説明してくれる。

フレア・エレメンタルは純粹な魔力の塊らしい。だから倒すには、まずその全体を固めて剣でダメージを与えられるようにしないといけないという。

まずシャリフが水の魔法で動きを封じる。すると、一瞬だけフレア・エレメンタルが実体化するから、私が白の剣でそれが纏う炎を薙ぎ払う。そうするとフレア・エレメンタルのコアの一部が現れるから、リリアンヌが黒の剣で全魔力を込めてそれを砕くのだ。

シャリフの説明に、私たちは「わかった!」と頷く。

「行くよ!」

私が走り出す。

一歩遅れてリリアンヌ。

——いつもよりちよつとタイミングがずれてる?

一瞬気になったけど、もう脚は止まらない。

シャリフが錫杖を掲げ、氷の魔法を唱える。

「氷結凝固術《アイスゲフローネ・フェステイゲールング》!!」

シャリフの杖の先から白い魔力が流れ出し、ゆらゆらと揺らめいていたフレア・エレメンタルを包み込んだ。

『ギギギギ! グオオオオ!』

するとその炎が、先のほうからピキピキと固まっていく。

魔物のすぐ近くまで追った私は、動きを止めたその炎の衣を、白の剣で切り裂いた。

炎の奥に、一瞬だけルビーのようなコアが見える。絶好のチャンス!

「今よ、リリアンヌ! ——あれ?」

振り返ると、思っていたよりもリリアンヌの距離が少し遠い。

リリアンヌが地面を蹴る。

フレア・エレメンタルの内部から再び炎が噴き出す。

『グオグオグオツ!』

炎の衣で、氷結魔法の効果を失わせて、自らの再生能力を活性化させたみたいだ。

黒の剣がフレア・エレメンタルに届く。だけど、その一瞬手前で、フレア・エレメンタルは再生し、新たな炎の衣を生み出した。そして、また実体なき炎が空間へと溶け込む。

「しまつ……!」

一撃が空を切り、リリアンヌから悔しそうな声が漏れる。

次の瞬間、フレア・エレメンタルは嘲笑うかのようにその身を膨張させ、灼熱の炎の奔流を迸らせた。至近距離!

「氷結結界《アイスゲフローネ・バリエール》!」

間髪いれずシャリフが炎を防ぐ魔法を唱えてくれる。私も思いっきり後ろにジャンプする。

「あつつ！」

灼熱の炎が氷の壁に激突し、轟音と共に水蒸気が噴き上がる。いくばくかの炎は、魔法の氷の壁で防ぎきれずに私の身体へと到達する。痛みが身体を襲う。いたいっ！

シャリフが走ってきて、私の前に膝を突いた。

「大丈夫かい？ エレナ？」

「うん。なんとか。——リリアンヌは、大丈夫？」

ダメージを受けた左膝を押さえながら立ち上がる。

リリアンヌを見る。彼女は炎の攻撃を避けられたみたいだ。ほつとした。

「ああ。——ごめん。……ちよつと遅れてしまったみたいだ」

そう言うリリアンヌは、いつも背中合わせで戦っているときよりも、二、三步遠くに立っていた。その距離が、妙によそよそしく感じられる。

——だから、ちよつとタイミングが遅れたのかも？ どうしたのリリアンヌ？

私はリリアンヌのほうに歩み寄った。

「リリアンヌ。もつと近づいてよ。いつもみたいに」

「あ……、あ、ああ。そうだな」

なんだかちよつとキョドったような反応。

——え、何？

「どうしたの？」

そう言うのと、リリアンヌが黒い瞳を逸らす。

「ちよつと、なんだか急に照れくさくなつて。エレナの身体に触れるのが。急に意識しちやつたっていうか、恥ずかしくなつたっていうか……」

そう言うリリアンヌが視線を地面に落とした。

こころなしか、頬が赤らんでいる気がする。

「え？ 何を言っているの？ だってリリアンヌは私のパートナーで、そんなの気にしたことなんてなかったじゃん？」

「それは、そうなんだけど。——エレナは……遙香なんだ、よね？」



なんだか言いにくそうに口をもごもごと動かすリリアンヌ。

そこで私も、急に思い出す。リリアンヌの中身は海斗だつてことに。

私とリリアンヌがパートナーつてことは、私と海斗がパートナーつてこと？

「ええい！ そんなこと、前から分かつてることでしょ？ 今はフレア・エレメンタルを倒すことに集中して！」

「——そうだよ。ごめん」

私が強引にリリアンヌに身体を寄せて囁くと、彼女は大きく息を吸って、頷いた。気持ちを

リセットするみたいに。そして黒の剣を構える。

目を閉じて、開く。

毅然としたその瞳は、黒の騎士リリアンヌ・フェルシタットそのものだ。

フレア・エレメンタルが、その炎の身体を大きく膨らませる。

『グオオオオオオー！』

そしてまた灼熱の炎を吐き出した。

体育館の中を真っ赤な熱波が駆け抜ける。

『氷結結界《アイスゲフローンネ・バリエール》ツ!!』

シャリフが唱える。私たちの前にそびえ立った氷の壁が炎の波を受け止めてくれる。

「炎がやんだら、今度こそ行くからね。リリアンヌ」

「わかっているよ。エレナ」

私たちは白の騎士と黒の騎士。あの世界で「南の魔女」に勝利した勇者だ。

やがて炎が止み、氷の壁も消失する。

私は地面を蹴った。リリアンヌも一緒に。

「シャリフ！ お願いい！」

間髪いれずに、詠唱が聞こえる。

「固まれ、エレメンタル！——氷結凝固術《アイスゲフローネ・フェステイゲールン

グ》——！」

私たちの間を氷の魔力が駆け抜けて、フレア・エレメンタルを包み込む。そして炎の魔物の身体をもう一度固めた。

「たあああ——！」

私が白の剣で炎を払う。私たちは二人で一つ。そんな想いを込めて。

「お願い、リリアンヌ！」

もう彼女は隣にいた。いつもみたいに。

リリアンヌの黒い剣が閃く。

その横顔は、どこかいつもより真剣で、必死さが滲んでいた。

その一撃は、今度は確かに赤いコアを捉えた。

パリーン！ とガラスが砕けるような小さな音を立て、コアが砕け散る。

フレア・エレメンタルは断末魔の叫びもあげずに、その内側から魔力を放出する。そして大気の中へと静かに消失していった。

「私に話しかけて」

その光景を見届け、ようやく肩の力を抜き、深く息を吐いた。リリアンヌが剣をさやに収め、私の隣にひざまずく。

「エレナ」

「ん？ どうしたの、リリアンヌ」

私とその真つ黒な目を受け止めるように見返すと、リリアンヌは静かに肩を落とした。

「一回目。失敗してごめん」

「何言っているの。誰でも失敗くらいあるよ。どんまい」

そうやって謝るリリアンヌの背中をとんとんと叩く。

「そう言ってくれると助かるよ」

「だって私たち、パートナーじゃん。助け合つての相棒でしょ？」

「そうだね」

彼女は少し申し訳なきような笑みを浮かべつつも、何かを呑み込みたいに目を閉じた。やがて顔を上げると、彼女はフレア・エレメンタルが消失した方向に視線を向けた。どこかそこちないその横顔に、どうしてだか海斗の横顔が重なった。